

## ジョヴァンニ・ベッリーニ作《聖なる寓意》の形態の源泉とその創意をめぐって

東北大学 佐々木 千佳

ジョヴァンニ・ベッリーニの《聖なる寓意》(ウフィッツィ美術館)は、制作年代、注文主、図像内容など現在も多くの問題が残された作品である。とりわけ図像解釈についてはこれまで様々な学説が提起されてきた。しかしながら、それらは画面の前景テラス部分のみの議論であったり、あるいは背景の一部分に論点を絞ったものが多い。そのため、本作品の特徴をなす2分割された画面構成について、また両者の関係性という視点から図像内容が解明されることはほとんどなかった。本発表は、この点を踏まえた上で、従来までの図像解釈中心の研究とはやや異なる視点からその画面構成の視覚的源泉を提示するとともに、そこに見られる創意について当時の宗教的、社会的文脈から考察するものである。

本作品のように、背景の峨々たる山岳風景と前景の宗教的な部分が同等に描かれ、かつ相互に結びついたような作例はきわめて珍しく、ここに何らかの発想源があったことが考えられる。その視覚的源泉として、特に広大な風景部分の類似性に着目し、1486年出版のブライデンバッハ『エルサレムにおけるシオン山とキリストの墓の聖地巡礼』のロイヴィッヒによる木版挿絵中のヴェネツィア図、さらにそれに基づいた1493年の木版挿絵からの影響を指摘したい。これらの版画はヴェネツィアの画家達には馴染みのものであり参照の可能性が高い。水面によって2分された横長の画面、ヴェネツィアの後背地としての険しい山岳の風景は、本作品の際立った特徴をなしており、これらの版画が本作品に決定的なインパクトを与えた可能性がある。それにとどまらず、前景の柵のイメージは、同書の「エルサレム図」の街壁を想起させるものがある。風景部分をヴェネツィアの後背地としての実景とみなすと、作品中のテラス内には、エルサレムを想い描く瞑想の空間としてヴェネツィアのイメージが重ね合わされていたのではないだろうか。

さらに、洞窟部分に当時のヴェネツィア貴族たちが推奨した観想的な生活との関連性が見られることを指摘したい。16世紀初頭のカマルドリの隠遁に代表される観想的な生活の理想が、画中で頬杖をつくメランコリー者として黒人の姿で表され、この時期のヴェネツィアの宗教的生活に対する思想を反映していると思われる。消失点がこの洞窟部分の近くにあることも看過しがたい。この人物、テラス入り口の扉、テラスの中心の生命の木が一直線上に配され、その観想の内容がテラス内の天上の聖なるイメージと連結する、という秘められた意味がこうした画面構成によって実現されているのではないか。また、テラス内をヴェネツィアとすると、テラスの端にいる聖パウロが剣で異教徒を追い払っている様子は、当時共和国が度々直面していた対トルコ戦争の象徴としてみなせる。ロイヴィッヒの版画を参照することによって始めて、ヴェネツィアをひとつの舞台設定とする創意が生まれ、当時の宗教的、社会的文脈をアクチュアルに組み入れることが可能となったのではないか。以上の考察を通じて、制作年代と注文主についても再検討したい。